

許せません！母と娘たちを苦しめる HPV ワクチン（資料）

●HPV ワクチンとは

子宮頸がんワクチンとも呼ばれ、子宮頸がんを防止するために開発されました。ヒトパピローマウイルス(HPV) が子宮頸がんの原因とされているため、ワクチンはウイルスをブロックし、子宮頸がんを予防することができるとされます。性交渉によって感染するため、性体験前の少女に接種することが推奨されています。このワクチンは世界中で使用されていますが、副作用の発生率が他のワクチンより高く、製薬会社も 1000 人に 1 人の副反応のリスクを公式に認めています。副反応は重篤で、多様。現れ方に個人差があります。

●多岐にわたる副反応

副反応は、感覚系障害(頭痛、目などの痛み、光過敏・音過敏、視力障害など)、運動系障害(脱力、けいれん、不随意運動、倦怠感)、認知・情動系障害(高次脳機能障害に相当する記憶障害、判断力や集中力の低下)、自律神経(めまい、耳鳴り、失神)・内分泌系障害(月経異常など)、呼吸機能障害、睡眠障害など多岐にわたります。

被害者の具体的な訴えは、「ハンマーで殴られているような頭痛」「目に鋭いものを突き立てられグリグリとかき回されるような痛み」「横になっていても脳みそが洗濯機に回されているようなめまい」など、きわめて深刻。頭痛、めまいと聞いて一般に想像する状態とは、レベルが違います。

失神、記憶障害なども。ある女性は、「何度も気を失う。家族の介護を受けており、自分では一日に何回気を失っているかわからない」といいます。記憶障害は「簡単な計算、漢字すらわからなくなった」にとどまらず、母親のことをいつも親切にしてくれるおばさんとしか認知できない、若年性認知症様症状も少なくありません。10 代の接種するワクチンでこのような後遺症が起きている現実はあまりに知られていません。

●エビデンスが（ほぼ）ない

以下は、厚労省「HPV ワクチンに関する Q&A」の抜粋です。（下線は渡辺）

～～問 2-8. HPV ワクチンはどれ位効くのですか？

公費で受けられる HPV ワクチンは、子宮頸がん全体の 50～70%の原因とされる 2 種類のヒトパピローマウイルス（16 型と 18 型）などの持続感染等に対して予防効果をもつワクチンです。海外や日本で行われた疫学調査（集団を対象として病気の発生などを調べる調査）では、HPV ワクチンを導入することにより、子宮頸がんの前がん病変を予防する効果が示されています。また、接種が進んでいる一部の国では、子宮頸がんそのものを予防する効果があることも分かっています。～～

下線部分で、一目瞭然ではないでしょうか。このワクチン、実施からすでに 10 数年経つにもかかわらず、子宮頸がんを予防できたと実証されていません。

●世界各国で係争中

諸外国でも製薬会社を相手どっての訴訟は起きています（コロンビア、英国、米国、インド、台湾など）。台湾では、すでに原告(被害者)が勝訴しました。集団訴訟ではなく個人訴訟だったため、判決が早かったとされています。日本国内では、2010 年に公費接種が開始され、2013 年 4 月には全国的な無料接種が始まりましたが、重い副反応の報告が相次ぎ、

たった2カ月で「積極勧奨中止」になりました。その後、被害者たちは2016年に全国4地裁に集団訴訟を起こし、約130人が訴えを起こしています。

●ワクチン接種者も検診は必要

HPVというウイルスは約200種類あり、うち15種類が子宮頸がんにつながります。現行のHPVワクチン（サーバリックス/ガーダシル）に含まれるのは2種類。本年2023年4月からHPVワクチンの薬剤が新しくなりますが（シルガード9）、含まれるのは9種類。つまり、HPVワクチンを信頼して打った人であっても、定期的な子宮頸がん検診は必要です。「HPVワクチン不要、子宮頸がん対策は検診のみで充分」という主張には根拠があるので

参考書籍『子宮頸がんワクチン問題』（みすず書房）

「2006年、子宮頸がんの病変に関連するウイルス（HPV:ヒトパピローマウイルス）のワクチンが米国で商品化された。「がんを予防するワクチン」の登場である。高い抗体価が長期にわたって体内に保持される仕組みによってHPVの感染を阻止するというこのワクチンは、現在までに125か国以上で少年少女に接種され、天井知らずの収益を生んでいる。

一方、世界中で重篤な副作用の報告が相次いでいる。自己免疫や脳の炎症との関連を解明しようとする研究が進んでいるが、因果関係をめぐるとの論争に決着はついていない。

このワクチンはどのように開発されたのか。臨床試験と接種後のモニタリングに問題はなかったか。大成功と称される製薬会社の宣伝戦略の実態。米国をはじめインド、米国、アイルランド、デンマーク、日本、コロンビアなど各国の被害と医師、政府の対応、司法の救済を求める少女・親たちの裁判闘争。

予防のためには多少の犠牲はやむをえないとする論理が被害者を生み出す事実に向き合うか。

科学論争から社会現象までを詳細な調査によって追い、HPVワクチンをめぐるとの真実に迫る。安全なワクチンのあり方を考えるための必読の書。」(裏表紙の解説文より)



参考動画「世界のHPVワクチン被害は今」

